

慶應義塾大学医療系三学部合同特別実習
中津地域診断実習
報告書

実習期間
2025年2月22日(土)～2月28日(土)

メンバー
看護医療学部2年 渡邊怜
医学部5年 泉知花

目次

1. 事前準備.....	3
2. 実習のスケジュール.....	4
3. 中津市での活動.....	4
3.1 社会福祉協議会 吉田様.....	4
3.2 外国人総合相談センター 矢野様、細川様、ウィン様、文文様...	6
3.3 青年会議所 大賀様、小畑様、黒瀬様、中山様、寺崎様.....	10
3.4 中津市役所 地域復興・広聴課.....	12
3.5 七音保育園 尾家様、芻様、江玉様.....	14
3.6 中津市役所 防災危機管理課.....	17
3.7 中津市役所 農政課.....	18
3.8 中津市役所 観光課.....	18
3.10 中津市役所 学校教育課.....	21
3.11 中津市役所 秘書広報課.....	23
3.12 中津市民病院 折田院長.....	24
3.13 中津市役所 まちづくり推進課.....	26
3.14 中津消防署.....	28
3.15 中津市役所 総合政策課.....	29
3.16 大分県立中津南高等学校.....	30
3.17 地域包括支援センター三光園.....	32
4. アクションプラン.....	36
4.1 アクションプランに至るまで.....	36
4.2 具体的なアクションプラン.....	36
5. 活動を振り返って.....	37
5.1 泉知花(医学部5年).....	37
5.2 渡邊怜(看護医療学部2年).....	38
6. 発表資料.....	39
7. 謝辞.....	44

1. 事前準備

- 6/29(日) 初顔合わせ、去年の地域診断の紹介、今後の予定共有、中津について@zoom
- 7/23(水) 中津市役所の方と顔合わせ、アドバイスをいただく@zoom
- 10/7(火) 地域診断①中津市の調べ学習@zoom
- 10/13(月) 地域診断②中津市の調べ学習共有@zoom
- 10/14(火) 地域診断③中津市の調べ学習共有、訪問したいところリスト作成、宿泊場所候補決定@zoom
- 11/15(土) 中津市役所の方に事前学習の報告、アドバイスをいただく(宿泊場所や移動手段なども含めて)@zoom
- 11/10(月) 訪問先をリストアップ、訪問先の割り振り、次回までに先方へアポイントメントを取り、各々質問表の作成@zoom
- 12/18(木) 質問表の確認、移動手段など検討@zoom
- 1/6(火) 中津市の歴史・特色についてについて情報共有
- 2/3(火) 訪問先へのアポイントメントの共有と最終調整@zoom
- 2/21(土) 中津市で見学すべき場所の共有@zoom
- 2/22(日)～現地実習参加

2. 実習のスケジュール

	2/22	2/23	2/24	2/25	2/26	2/27	2/28
午前		中津城 福沢諭吉旧宅観光	社会福祉協議会	青年会議所 地域振興・ 公聴課 総合政策課	防災危機管理課 農政課 観光課 企業立地・雇用 対策課 学校教育課 秘書広報課	地域包括支 援センター	最終発表会
午後	到着	耶馬溪観光	社会福祉協議会 市長表敬訪問 中津市外国人総 合相談センター	七音保育園	中津市民病院 まちづくり推進課 中津消防署 南高校	発表準備	

3. 中津市での活動

3.1 社会福祉協議会 吉田様

【日時】

2月24日(月) 9:00～15:30

【場所】

社会福祉協議会

【内容】

- すずめの家の沿革

すずめの家は住民同士の繋がりを作りたいという思いから住民自身の意思で発足した画期的な寄り合い所である。創始者である吉田日出子さん(瑞穂さんのお母様)は、新興住宅地であった沖代地区で住民間の繋がりを作りたいという思いを抱き、公民館に通い始めた。徐々に人が集まっていき、「沖代おじさまクッキング」や「高齢者ミニデイサービスすずめのお宿」など、公民館を使った活動が始まった。その後、地域の様々な背景を持った人材を生かしながら「アイラブ沖代塾」「にこにこ劇団」などへとさらに活動が広がっていった。また、ボランティアでは対応しにくい場合に手を差し伸べられる手段として、有償の「沖代どんぐりサービス」を開始した。活動の幅が広がるにつれ公共の施設である公民館の利用が難しくなったことから、リサイクルバザーで資金を調達し、空き家を利用して「すずめの家」を発足した。これが、その後の活動の拠点となっている。一時は特別養護老人ホームからアウトデイサービスの受け入れも行っていたが、コロナの影響により現在は中断している。

- すずめの家のスケジュール

9:30 スタッフのうち当番が掃除や調理を始める
10:00 地域の高齢者が思い思いに集まってくる
お喋りタイム
12:00 昼食(300円)
13:00 歌
13:30 コーヒータイム(100円)
14:00 お帰り体操
14:15 解散

- ソファでおしゃべりをしていた女性の方々

すずめの家に参加し始めたのは、ケアマネージャーや友達から紹介されたり、家の前を通りかかって何をしているか気になって聞いてみたりしたことがきっかけだった方が多かった。家にいたら寝て起きてだけの生活で、貝が殻を閉じるように人と喋らずに過ごしていたが、ここに来たらとても楽しいと口を揃えて仰っていたのが印象的だった。

- 畳の間にいらした男性の方々

男性は女性のように取り留めなく話すということが苦手で、事務や集金、季報刊行や紙ベースで保管されていた歌詞の入力作業を任されるなど役割があった方が参加しやすいとお話し下さった。吉田日出子さんは、男性スタッフが加わることで女性だけの場よりも雰囲気引き締まるため、男性の存在も重要と仰っていた。

- スタッフの方々の声

吉田日出子さんは、誰かに依頼されて行うよりも、資金管理や場所の賃貸契約などを自ら主体的に始めた方が奮起できると仰っていた。スタッフには90代の方もいたが、各々が出来ることを担うことが大切である。年齢の階層が一定程度あるのが重要であり、年配者がいることで諍いが減り居心地の良い雰囲気形成される。参加者の募集に関しては積極的に勧誘するのではなく、友達などの紹介で入った方が継続しやすいとのことであった。新たに参加する人は、最初は前にいた地域と勝手が違うため馴染むまでは大変で、1回来て辞めてしまう人もいる。しかし、継続して参加していくうちに慣れる。吉田さん始め創始者の方々の高齢化や定年退職の高齢化によりスタッフになりうる人材の確保が大変となっている。

- 社会福祉協議会

地域福祉の目的は、協働による孤立させない地域作りである。地域福祉活動は、制度や施策に縛られることなく、全住民にとって住みやすい地域となるよう住民同士が協力して行う活動である。具体的には、テーマ型ボランティア、地域ボランティア、住民型有償サービス活動、ネットワーク作りなどに分類される。

社会福祉協議会は圏域を意識しながらこれらの住民の活動を支援し、地域住民同士や関連機関を結びつける役割を担っている。活動の中心な考え方には多機関協働があり、1人の相談者に対し、より多くの関連機関が連携し支援にあたる体制の構築が望まれている。

これらの活動の中でも、特に地域に密着し、活動内容を限定しない地域ボランティアは、地域作りにとって要となる存在である。地域ボランティアには、給食ボランティアや寄り合いの場作り、見守り活動などがある。給食ボランティアは中津市で最初に開始した。また、寄り合いの場として、地域サロンや広域型いきいきサロン、いきいきサロン、コミュニティ食堂、サロンの週一体操などが設けられている。これらは同じ地域に暮らす住民同士が対等な立場で関わることができ、排除されずに自然に相談ができる場であり、心の拠り所として重要である。見守り活動は山間部で活発に行われており、近い範囲でお互いに見守ることで日常的な支え合いのみならず災害時の備えとしても機能する。

住民型有償サービスはスタッフそれぞれの経験や特技に合わせて行われる活動である。提供者も利用者も等しく地域住民であるため、支援を受ける側も一定の配慮が必要となる。

更に、地域福祉計画及び地域福祉活動計画策定を契機として、地域作りに関わる多様な機関や関心のある住民が集う地域福祉ネットワーク協議会が創設された。

その他、余暇活動支援、障害者の居場所作りなど、年代別の障害者支援も行っている。これに付随し、ゴミ屋敷の掃除も支援している。加えて、くらしの総合相談窓口での生活や将来に不安がある人への支援、権利擁護支援、引きこもり支援、認知症の方のためのオレンジカフェの運営、フードバンクnicoの活動など、多角的に活動している。

3.2 外国人総合相談センター 矢野様、細川様、ウイン様、文様

【日時】

2月24日(月)17:10～18:40

【場所】

外国人総合相談センター

【内容】

- 居住実態について

質問「中津市に住む外国人の中でもミャンマー人が多いのは何か要因があるのでしょうか。」

大分県内でも、全国的にもミャンマー人が多い。理由としては、ダイハツ九州の工場があることがあげられる。派遣社員として、ミャンマー人を雇用していることが多いため。母国がクーデターで国内にいれないので、避難的に来ている人がいる。特定活動(国が定めたもの。一番複雑な在留資格。技能実習に当てはまらないもの。)という在留資格(業種のしぼりが少ない)がある。特定活動の派遣社員が多い。中津は生活がしやすいという点もある。季節がミャンマーと変わらない点、助け合う文化がある。中津の派遣の担当がサポートしてくれるが、他の地区ではサポートしてくれる人がいない。そのため、他の地区に移っても戻ってくる人が多い。あとは、ベトナムやミャンマーのお店があり、食べたいものがあるのも理由としてあげられる。

質問「外国人が中津市に在住する理由には、どのような内容のものがあげられるのでしょうか。」

文文さんは、家族と仕事が理由で中津に来た。永住許可をとって、長くいるつもり。仕事があるということが一番で、住みやすい、中津の人が優しいという点がこの前のアンケートでも上位となっている。派遣の人は、給料だけで言ったら他の給料が高いところで働きたいとなるが、住みやすさもあって中津は総合的に選ばれやすい町。他の町では、拒否されたが、中津ではアパートで22時まで楽器の演奏していいと言われて、中津の温かさを感じた。他の地域にいて、良さを聞いて中津に来る人もいる。中津の小さい事業所は人手が足りず、働きたい外国人の需要とマッチするため、移住してくる。

質問「中津市の外国人の就業先はどのような場所があげられるのでしょうか。」

ダイハツと下請けの工場が主である。技能実習や特定活動の在留資格が多いので、製造系のところで働いている人が多い。高度な技術保有者として、別の職種に就いている人もいる。

- 支援について

質問「子育てに関しては、どのような支援をすることが多いのでしょうか。」

子育て支援課か教育委員会に繋げて、日本の制度の理解をしてもらう。実際の手続き上で言葉の違いによる困りごとをここで支援する。本人の理解が足りず、専門の部署でフォローしてほしいという気持ちがある。移住したら、在留資格があれば学校に通うことはできる。必要な書類の手続きをする上で、困ったことへの支援をしている。

質問「就業上で支援を要するのは、どのような場合があげられますでしょうか。」

在留資格に関する内容が多い。特定活動で、日本にいたいけどどうすればよいかなど。あとは、休みがとれないなど労働条件についての相談があり、対応の際には、問題の背景を理解するようにしている。労働者側も雇用側どちらにも問題がある場合が多い。ニーズを確認して、必要な情報提供を行うが、企業のアプローチまではやっていない。それよりも上のは、労働基準課やハローワーク、市の就労相談支援につなぐ。

質問「上記以外で、どのような支援をすることが多いのでしょうか。」

行政の手続きの手助け。必要なところに繋ぐつなぎ役。言葉が分からなくて、制度が理解できていない方が多い。例えば、税金に関する支援だと、国税はまず予約をし、翻訳の書類をもらい、手続きを進めるという段階を踏む必要があるため、その支援を行う。その他の生活トラブルに対して、警察や行政につなぐこともある。

質問「相談に来られる方に対しての支援だけではなく、センター側から何か働きかけることはあるのですか。」

出張相談やSNSなどの手段によって、外国人のアウトリーチ支援を行なっている。また、地域に住んでいるキーパーソンを連れてきて、意見交換をしている。中津に長くいる人など、日本の生活をよく分かっている人をセレクトして、会議をするなど、個別的にも組織的にも支援。外国の方は生活上のことで苦労しており、その苦労を少なくするために、働きかけている。NPOとしても別のサポートをしている。NPOと外国人相談センターは別組織であり、委託という形で、NPOに活動をしてもらっている。

質問「一人一人にきめ細やかに対応するノウハウはどのように培われたのですか。」

住んでいる外国人が多く2年かけて蓄積されたことと、研修に必ず参加していることが、他の地域の相談にも対応できる秘訣。中津市内に限っては、各地域のイベントで出張相談を相当行っている。まずそこで、存在を知ってもらうことで繋がりができている。一件の相談に対して、領事館から大使館まで問い合わせ、相談者にお伝えするため、1～2時間半かけて調べる。あとは、職員に福岡の研修など勉強会に参加してもらっている。色々な人と会って、ネットワークを作るということが大事。他の市町村でそこまでやっているところはあまりないと思う。

質問「相談に来られる外国人同士の繋がりをつくることはあるのですか。」

センターの最終的な役割は自立してもらうこと。相談者をコミュニティに紹介する。例えば、外国人の親子を支援する「あいことば」の紹介をし、本人が希望すれば、つないだり、子どもを連れて遊びたいという相談に対し、遊べる場所の情報提供や子育て支援センターに繋いだりしている。相談の窓口・言語のサポート・生活の相談をしましようという国の方向性を基本として、他の部分は他のコミュニティにつなぐなど、相談者に対して、情報提供することが大きな役割。

● センターの方の思い

センターとしては、公的なことの手続きの手助けをすることが主だが、失踪している人が警察でお世話になっていたという相談に対して、引受人になって、中津市の福祉課や社会福祉協議会と連携をとって、帰国までの面倒を見るという対応をしたこともあった。センターとセンターでできないことを連携して、行っていくことが必要。中津市で安心して生活してもらいたい。そのためにもセミナーを行っている。中津の人にも外国人の存在を知ってもらうことが必要。

中津市の「外国の市民」が”中津に来て良かった”、中津市の住民も”外国の方が来てもらって良かった”と思ってもらえるように活動をしている。大分県では、相談センターが5つしかない。その3番目に中津ができたが、3000人規模(都会すぎず田舎すぎず)でできているところは珍しい。福岡に近いなどの交通の利便性があるところも特徴だと思う。宇佐や高田は規模が小さい。人口が800人とか1000人。市町村によって、外国人の性格が違う。県のセンター兼大分市のセンターは大分市にある。別府市にはないが、留学生が多いので、そちらの対応センターがあり、外国人の相談対応を賄っている。本当は中津市みたいな相談センターがほしいという声が上がっている。中津市の相談センターには佐賀県や滋賀県、別府市からの相談もある。SNSの発達も要因としてあると思う。例えば、ミャンマー出身の相談者が佐賀の相談センターに相談して対応できず、中津にミャンマーの相談員がいるからと中津の相談センターに相談してきた。本人の困っていることを聞き取るには、母国

語を知っている人が必要で、ミャンマー・中国の相談員がいる中津に相談してくる。その際は、相談内容を聞き取り、後日オンラインでつないで対応をする。全体的に、ケースバイケースの対応が必要となる入国審査関連の相談に乗ることが多い。入国管理局に来てくださいとなるが、その前の段階として、相談センターで対応している。

地域でミャンマー人向けのセミナーもやっている。日本人が外国人に対して、距離をとっている場合もある。日本人と同じような接し方をしてもいいんだよということを知ってもらうことが必要。東京での外国人の交流と中津での外国人の交流とでは違うところがある。東京では日本人同士でも繋がりが少ないが、中津では、日本人同士の繋がりが多い。そうになると、外国人と日本人の交流のあり方の位置づけも変わってくる。外国の人と関わる時には、英語が話せないといけないという意識を持っている日本人が多いが、実際は英語が共通言語という意識よりも、来ている人は日本語か母国語で話す。実際、ミャンマーの留学生で日本の友達ができないという声もあり、日本人は英語が話せないという意識で忌避し、ミャンマー人は仲良くしてもらえないという否定的な思いを抱いてしまっている。

ローカルが故に話しやすい。ちょっとした触れ合いが大事。外国人が日本語で話しかけても、一部の人は逃げちゃう。交流するきっかけが無い。交流の場が必要。日本人と結婚したいという相談もある。多文化共生という認識を育てていって欲しい。

- スタッフの方々の思いに対して

質問「中津市の外国人総合支援センターが頼りになる・強みである点はどのようなところなのですか。」

相談を受けて、大使館にすぐに繋ぐのではなく、調べて、本人に伝えて、職員間でも情報共有を行っている。入国管理局で行う手続きの過程を調べて、最終的には、入国管理局に行くだけで、すぐ終わるようなところまでサポートする。入国管理局のある大分市まで何度も行かずに済む。入国管理局の職員さんも”中津からの相談が減って、助かった”と話していた。あとは、優秀な相談員のおかげ。日本に長くいても、分からないことが多い(相談員の方も)。外国の人の気持ちを職員間で共有していることも強み。

質問「どのような経緯で相談員になられたのですか。」

① ウインさん

日本人と結婚したことがきっかけ。日本で生活する上で知らないといけないことが多いという思いと、中津のために何ができるのかという思いで相談しにきたことがきっかけで、スタッフに声をかけられて、相談員になった。他の仕事をしていて、週1回だったが、今では毎日相談員として働いている。

② 文さん

日本にきた外国人の方を手助けしたいという思いがあったため。観光課でアルバイトしていて、プライベートなことで縁があり、センターが立ち上がるタイミングで相談員になった。働きながら、8カ月間の入国管理局の研修で知識を身に着けた。

質問「相談員の方が日本に来たモチベーションは何だったのですか。」

① ウインさん(ミャンマー出身)

高校の時に、校長が日本の良さを伝えていたことから、日本に来たかった。日本の会社にミャンマーで就職しており、その後結婚して日本に来た。

②文さん(中国出身)

歴史の関係で、日本と繋がりがある人が周りにも多かった。漢字があることから第二言語として、日本語を選んだ。せっかく学んだからと、夜の日本語学校に通い、その後日本に留学しに来た。

3.3 青年会議所 大賀様、小畑様、黒瀬様、中山様、寺崎様

【日時】

2月25日(水)9:00～11:15

【場所】

市役所3階

【内容】

● 青年会議所の概要

青年会議所(Junior Chamber; JC)の趣旨は、ビジネスの視点で地域の課題を捉え解決を目指すことである。20代から40代の男女で構成される。前年度や今年度は、愛郷心を高校生に持ってもらったり外国人を地域に取り込んだりすることを目標に活動を行ったり、日本あるいは世界全体のJC会議へ積極的に参加したりした。現在の中津地域の課題は少子高齢化や観光面の弱さなどが挙げられる。

● 就業について

質問「就職先を中津市内に決めた理由はなんですか。」

①大賀さん

中津市が好きで、高校3年生の時には家を継ぐことを決めていた。一度福岡に進学し大阪で就職したものの中津に戻り、現在は家業を継いでいる。

②小畑さん

高校卒業後は自分の店を開業したいという夢を持ち、福岡の飲食店で修行していた。しかし中津市の大洪水で家業の事業所が被災し存続の危機に瀕したため中津に戻ってきた。お父様が青年会議所のOB。

③黒瀬さん

神奈川県に進学したものの中退し、現在は家業を継いでいる。

④中山さん

福岡の中心部出身だが、中津出身の旦那様のご病気をきっかけに転居した。子供が小さかったため前職を生かし、システム開発の会社を興した。

⑤寺崎さん

福岡の北九州出身。中津では前職と同様スーパーで働いていらっしやる。中津が地元ではなく職場の悩みを話す人がいなかったため、知り合いを増やす目的で青年会議所に入った。

質問「勤務先への交通手段はなんですか。」

車。バイク、自転車でも距離によっては可能。駐車場代は安く、3000円/月程度。バスは便が少ないことや目的地とバス停間に距離があることから、高校生や一部の高齢者を除きほぼ利用しない。

質問「中津市の働きやすいところはどこですか。」

人の雰囲気柔らかく、オーナーも家族のように接してくれる。道路がシンプルかつ渋滞がないため通勤が楽。

質問「中津市の良いところはどこですか。」

以前から出生率が高く、急激な人口減少がない。福岡方面への交通の便が良い。福岡放送の電波が届く。耶馬溪の一目八景や青の洞門、ダムのマリンスポーツなどの観光資源。

質問「中津市の働きにくいところはどこですか。」

22時を過ぎるとチェーン店以外全て閉まるため不便。中津市民病院を除くと産婦人科が一軒しかなかったり、唯一健診を行っているおじいちゃん先生の声が聞き取りにくかったりと、医療の選択の自由はない。歯医者に関しても、数はあるが需要に対して枠が不足しており、予約が埋まっている。

- 青年会議所の勧誘について

青年会議所の構成員は世襲経営者・自営業者が多く、サラリーマンでは会費を会社が負担してくれる銀行や保険系の会社に勤める方が多い。中津以外の土地に住んでみないと中津の良さは分からないので、若い人には一度中津の外に出て欲しい。しかし、青年会議所に所属している方々のような、自分から地域作りをしていきたいという人と、逆に地域に何かしてもらえるのを待っている人に二極化している。所属できる年齢に上限があり毎年人が抜けて行くが、人が入るかどうかはその年次第で、0人の年もあれば10人を越える年もある。

- 地域情報について

質問「観光要素のからあげ、ハモ、温泉について実際のところどのようにお考えですか。」

唐揚げは祝い事が出てくるなど頻繁に食べる。唐揚げマップは市民はあまり見ない。ラーメン博物館のような唐揚げに関する施設があっても良いかもしれない。鱧は地元の人あまり食べない。宿泊施設はビジネスホテルしかない。温泉はあるが別府ほど多くなく、銭湯はあるものの雰囲気の良い宿泊施設はない。福沢諭吉に関しては、一万円札の肖像では

なくなってしまったため、一般の人は興味がなくなって行くのではないか。中津城や福沢諭吉旧宅などは社会科見学で行くがその後は行かない。溪石園や耶馬溪に関しても、見頃の季節は行くがそれ以外は行かない。

質問「市報なかつを読んだことはありますか？読んでいる媒体は何ですか？存在を知っていますか？」

回覧板で来たり実家に届くため、紙媒体で読んでいる。市報以外にもスマイルなどの地域の情報誌がある。ホットペッパーや食べログがあまり使われないことから、情報誌は身近な存在である。ただ、地域に興味がないと読まない内容であり、青年会議所に所属していない友人と地域の話をする機会はない。一方で中津市のInstagramについては存在を知らなかった。

質問「子育てをされていて、良かったこと」

中津市の良いところは、園庭があること、公園が豊富にあること、車を使うことで子供と一緒に移動が楽なこと、治安が良いこと。

3.4 中津市役所 地域復興・広聴課

【日時】

2月25日(水)11:20~12:00

【場所】

中津市役所 3階会議室

【内容】

- 地域復興・広聴課について

「中津で暮らす」(移住のすすめ)というInstagramの運営を市の若い職員が担っている。東京で移住相談者と話す相談会を行っているが、中津市の認知度が低いと感じている。Instagramを通して、中津市のことを知ってもらい、まずは来てもらいたい。

質問「Instagramを活用するという点は、若い世代をターゲットとしているのでしょうか。」

高齢化で地域の活動が衰退しているため、定住していただくがなくとも、若い世代に来てほしい。何が刺さるのか分からなかったため、相談会で中津市に対するイメージとしてよくあげられる、からあげをきっかけに中津市のことを知ってもらおうと、現在は中津のからあげのお店を紹介する投稿をInstagramにアップしている。

今年、選手としてエントリーする九州に興味がある人、九州が好きな人、移住希望者を各地域がドラフトで獲得し、地域復興を行う「九州移住ドラフト会議」にて、中津市が優勝し

た。ドラフトで獲得した大分県のデザイナーと市役所職員、地域おこし協力隊が協働し、からあげ体操やからあげマルシェ、からあげ折り紙を制作した。

- 移住について

質問「中津市の『移住パンフレット』を拝見し、市の魅力や暮らしの様子が分かりやすく紹介されていると感じました。中津市としては、今後、移住者の増加を重要な施策の一つとして位置づけ、積極的に注力していく方針なのでしょうか。」

移住者の方が増加していくというのは重要だが、移住・定住は難しいところもあるため、関係人口を増やしていくことが重要だと感じている。宇佐市、高田市などでは、移住に対する補助金の算出の推進を行っているが、中津市では補助金算出の推進を行う予定はない。中津を好きになってもらって、一回限りの観光ではなく、祭りやからあげフィスティバルなどで週末に戻って来てもらうことが理想。

質問「移住・定住の難しさとはどのような点にあるのでしょうか。」

都心から物理的距離が離れている点や生活スタイルが全く異なるという点が移住のハードルをあげている。移住先に自分の求めるものがないと移住を決断するのが難しい。若い人が家族を持とうとする中で中津に来るのは難しい。

質問「移住されてくる方はどのような点を魅力的に感じて決断されるのでしょうか。」

九州出身で余暇で中津に来て良い町だと感じたという方や中津出身の祖父がいる方など、何かしらの縁があって来る人などと出会った。条件が同じところは沢山あるので、最後は“人”が決断を後押しする。

山国地区に地域おこし協力隊になり、移住した方がいる。長崎の企業で働いていたが、子どもと関わる時間がほしいという点から田舎に移住したいと思っていた。中津市役所の職員が中津を案内してくれた上、中津のおいしい梨を渡してくれたやさしさに惹かれたことが移住の決め手になった。人と人の結びつきが移住に繋がる。

- 地域おこし協力隊とは

総務省が所管の事業。地域を活性化するために、自治体が雇用する。1年毎に更新する中津市の会計年度職員。別の職に就いているわけではなく、地域おこし協力隊を職業とする。都市部から過疎地域に人を動かすための施策。委託型で、地域を活性化してもらい、退任後は移住するという制度。最長3年間でその期間は給料が支払われる。中津では現在8名存在。募集要項としては、三光での八面山の管理とイベントのプロモーターや本耶馬溪の自然文化の発信などがあげられる。今後定住して活躍するところまで見越しているの、若い方を積極的に採用している。

質問「関係人口を増やしていくためにからあげ以外にピックアップできる要素として、どのようなものがあるのでしょうか。」

住民主体の関係人口を生み出すような活動に補助金を出している。今だと、八面山のキャンプ場、山国地区の映画好きの人が集うようなカフェと民泊を行っている人がいる。速

さの競争ではなく、ポイントで地域の食べ物を食べるようなツールド耶馬溪というイベントもある。

質問「地域復興・広聴課での今後の課題としてはなにがあげられるのでしょうか。」

宿泊施設があるけれど、ビジネスホテルが大半であり、近隣市を目的地とした経由地になってしまっている点が課題。それに対する答えが見つけられていない。

3.5 七音保育園 尾家様、勿様、江玉様

【日時】

2月25日(水)13:30～17:30

【場所】

七音保育園

【内容】

七音保育園は企業主導型保育園である。隣接する西野物産に所属するが、保育所の運営は扇城学園が担っている。自社企業と連携企業の職員から定員の半分、その他の家庭から地域枠として半分の園児を募集している。園見学での雰囲気の良い、土曜保育があること、少人数制であることなどが人気の理由である。名前の通り音楽性を養うことが重視されているが、他にもリトミック、体育、造形あそび、英語など感性を育てる保育が実践されている。

● 職員の方々へのインタビュー

質問「子どもの数に対して保育園は足りていると感じていますか。」

「足りている」という意見が多かった。一方、数字上は足りているものの、第一希望に必ずしも入れるわけではなかったり、途中入園の場合や兄弟一緒に同じ園に入りたい場合に調整が難しかったりするため、必ずしも足りているとは言えない、という意見も散見された。

質問「保育士さんの数は十分だと感じていますか。」

全国的に保育士さんの数は少なく、今回も足りていないとの回答が多かった。七音保育園では朝7時30分から夕方18時30分まで長時間園児を預かっているが、職員も子供を育てている人や妊娠中の人が多く、早番・遅番の人が足りない。また、国の基準を満たしていても十分なケアが難しい場合もある。例えば基準では0歳児3人に対して1人の保育士を設置することになっているが、現実的にそれでは人が足りない。

中津市の課題として、障害のある子に対する対応がある。「障害がある」と診断された場合は適切なサービスを受けることができる一方で、医師不足により、その診断を受けるまでに時に半年以上と非常に長い時間がかかる。また、診断までには至らないグレーの子に対しては、その子の成長を見守るという方針になることが多く、早めの介入をしてあげるこ

とができない状態になってしまっている。ご両親にとっても、この子の成長の過程だから大丈夫と一度判断されてしまうと、自分の子に人より手厚いケアが必要だということは受け入れ辛いものであり、何年後かに自分の子供の他の子との違いが顕在化した時にショックを受けてしまう。この点福岡はケアが手厚く、一般より見守る目が必要な子がいた場合は保育園に人を派遣するよう要請することができる。中津でも他機関との繋がりを作ることはできているが、補充人員要請に診断書が必要な現行制度が変わらない限り現状を改善することは難しい。

また、七音保育園は病後児保育はあるが病児保育はなく、課題となっている。病後児保育とは、園児が発熱などした場合に家族が迎えに来るまで看護師が面倒をみることができる仕組みであり、家族が急いで仕事を切り上げて迎えに来なくても良いという利点がある。一方で、例えばインフルエンザになると5日間隔離しないといけないが、解熱後は家族が仕事に戻りたいとなった場合に子供を預けることができる病児保育はやっていない。組織の運営上利用人数を一定程度確保する必要があるため、改善が難しい。

質問「子育てをしながら働いている親御さんにとって、企業主導型保育園がどのように役立っていると考えますか。」

設置企業内にあるため自社の従業員は物理的に距離が近く安心感がある。入園手続きは自治体を通す必要がなく直接契約のためスムーズに入園できる。規模が小規模なため一人一人に寄り添った保育ができ、保護者にも丁寧な声掛けができる。保育時間が長く、フルタイムで働く方も預けやすい。

- 保護者の方々へのインタビュー

質問「中津市で子育てをしていて、地域の魅力だと感じる部分はありますか。」

- ・特にない。
- ・大貞公園や米山公園など、大きい公園が最近整備されて、遊ぶ場所が多い。
- ・中津が地元のため、近所のおじいちゃんおばあちゃんに知り合いが多く、子供達を可愛がってもらえる。
- ・子育て支援センターなどで地域の方と関わることができる。
- ・県外からやってきた友人から公的機関からの支援が充実していると聞いた。
- ・部活動が活発。福岡の田舎では部活の種類に限られるため、中津まで来て参加している。

質問「中津市で子育てをしていて、困る時はありますか。」

- ・検診の間が空いており、その間に子供の成長について悩むことがあっても相談しにくい。
- ・支援が少ない。手厚い部分もある気がするが分かりにくい。
- ・雨の日に遊べる所が少ない。

質問「普段、中津市内で育児の悩みや嬉しかったことを共有できる『地域のつながり』はありますか。」

・ないという意見が多かったが、あると答えた方では、支援センターのサロン、職場、友人を挙げた方が多かった。

・支援センターで開催されるイベントに参加しない理由は、忙しく日程が合わないこと、親が人見知りであり気が進まないこと、家族や友人と相談できており参加する必要性を感じていないこと、保育園にイベント告知がなく情報があまり入って来ないことなどが挙げられた。

質問「最近中津/中津外で、お子さんと一緒に行って一番楽しかった場所はどこですか。」

- ・セントラルシネマ三光
- ・プレイルーム
- ・大貞公園
- ・三光コスモス園
- ・ゆめタウン
- ・四季の丘公園
- ・阿蘇ファームランド
- ・水族館、動物園
- ・小倉、福岡

質問「市報なかつを読みますか。」

ほとんどが、紙媒体で、ペラペラとページをめくる程度に読んでいる、という回答だった。今の情報に満足しているという回答もあったが、どのような情報があったらより嬉しいか質問したところ、同世代の子供との交流ができるイベント情報など、子供についての情報が欲しいという回答が多かった。また、普段市報なかつを読まないという人に話を聞くと、活字だけだと読みづらく、普段はInstagramなどで情報を得ているとのことだった。

3.6 中津市役所 防災危機管理課

【日時】

2月26日(木)9:00～9:30

【場所】

中津市市役所3階

【内容】

- 中津市の防災の概要について

中津観測所の降水量は全国平均並ではあるが、耶馬溪観測所では降水量が比較的多い。過去には、平成24年に九州北部豪雨、R5年に山国川氾濫が起きており、その他にも土砂崩れや濁水などの被害に遭った経験がある。現在災害リスクとして注意すべきなのは山国川の氾濫・内水氾濫や広い山間部地域での土砂崩れなどである。特に防災マップでは、山間部で人が住んでいる所はほぼ土石流、地滑りの高リスクに分類されており、注意喚起が必要である。

質問「市民へ向けての防災情報の伝達はどのように行っているか。」

直近1年間で30件以上100人以上に対し、主に高齢者や小中高校生を対象とした防災出前講座を行った。若い親世代をイベントのターゲットにするのは非常に難しいため、子供に向けて中津ジュニア防災リーダー検定を実施しており、それに同伴してもらう形で親世代も巻き込んだ取り組みとしている。

災害の危険性を身をもって感じないと意識が薄くなっていくものなので、力を入れすぎない程度に市報なかつで定期的に流すなどしている。

質問「市民が取るべき対策はなんですか。」

自然災害リスク、避難先、避難開始のタイミング、避難情報の収集手段、災害に備えた備蓄について、市から個人に対し指示を出すことは出来ないため、自分でいざという時の行動について決めておく必要があるということを周知している。また、企業向けにBCPを推進している。特にリアルタイムの情報伝達手段は多重化を図っており中津メール、防災ポータルサイト、緊急メール、放送など様々であるため、自分に合う方法を選んで受信してもらうことが可能である。

3.7 中津市役所 農政課

【日時】

2月26日(木)9:30～10:00

【場所】

中津市市役所3階

【内容】

- 中津市の農業について

中津市の人口のうち4%程度が農業に従事している。作物は水稻が圧倒的に多く、裏作として大多数は麦、本耶馬溪では蕎麦を育てている。その他には梨や葡萄、かぼす、さつまいもなどを複数栽培している農家が多い。耶馬溪ダムやその上流では山国川から水を引いている。

50歳未満で新規就農する人に向け、梨、いちごやネギの育て方を2年間学ぶことができる研修では150万円/年補助金がでている。それほど補助しないと人が大きく減ってしまってしまいう状況にある。また、農地を大きくし、1人が耕せる土地を増やす取り組みも行っている。

3.8 中津市役所 観光課

【日時】

2月26日(木)10:00～10:30

【場所】

中津市市役所3階

【内容】

● 観光について

質問「近年、SNS等を活用した情報発信に力を入れておられる印象を受けましたが、どのように運営を担っていらっしゃるのでしょうか。」

観光課の公式アカウントについては、観光課職員が中津市の観光スポットやイベント情報等を月に何度か投稿するという形で運営している。ただ、行政の公式アカウントは公平・中立な立場を守る必要があるため、特定の店舗やスポットを過度に目立たせることが難しいという側面がある。そこで、中津市の魅力発信に協力して下さる「中津市観光PRパーソン」に、より詳しく、中津市民だからこそ伝えられる中津の魅力を発信するアカウントの運営をお願いしている。

おすすめのカフェや開催中のイベントなどに実際に訪問し内容を紹介しており、20代～30代のターゲット層と同年代のPRパーソンが、自身の等身大の言葉や感性で発信することで、「自分たちが行きたくなる場所」としての魅力をダイレクトに伝えている。

質問「観光課としては、今後さらに市外・県外からの観光客増加を積極的に目指していく方針なのでしょうか。それとも、地域住民の暮らしや地域性を重視しつつ、観光客数の拡大は一定程度に抑えた持続的な観光を志向されているのでしょうか。」

今後の展開については、「中津市総合計画」に基づき策定された「中津市観光振興計画」(2022-2026)を運用しているが、2026年度には次期計画の策定を予定している。策定にあたっては、大分県が2025年に策定した「日本一のおんせん県おおいたツーリズム戦略」(2025-2027)との整合性を図りつつ検討を進める方針である。同戦略において新たに「住民満足度」や「再来訪意向率」が数値目標として掲げられたことを受け、中津市としても観光客数や消費額の拡大に加え、地域住民の生活と調和した「持続可能な観光地づくり」を目指していく方針になる予定である。

質問「中津市の観光資源として挙げられる「ハモ」や温泉について、実際の観光客からの人気や来訪動機としての位置づけはどの程度のものなのでしょうか。」

中津耶馬溪観光協会が実施している来訪者アンケートの分析より、ハモの位置づけは特別感のある「高単価グルメ・宿泊のフック」である。ハモは、日常的・手軽に消費される「唐揚げ」とは異なり、予算がやや高め(10,000円～50,000円以上)の旅行者や、夫婦・家族旅行での「特別な食事」「宿泊を伴う旅行のメインディッシュ」として明確に機能している。データからの裏付け(ハモに関連する回答:計20名/291名中)

- ・Q15(今回訪れた場所)で「はも料理店」を選択:16名
- ・Q18(心に残ったグルメ・スポット)で「ハモ/鱧/はも」を自由記述:11名
- ・Q6-1(具体的な目的)で「ハモ/鱧/はも」を自由記述:3名

・分析:「はも料理店」を訪れた16名のうち、半数以上の11名が「心に残ったグルメ」としてわざわざ自由記述でハモの美味しさ(「ハモ料理、とりてん、中津城」「はもの刺身」「鱧カツ丼」「はも料理の美味しさに感動しました」など)を綴っている。手軽な唐揚げに対し、ハモは「じっくり滞在して味わい、深い満足感・感動を生む」観光を促すポテンシャルを持ったプレミアムな位置づけである。

温泉の位置づけは、中津市周遊の「癒しのサブスポット」である。温泉は、アンケート内で主目的として大きく目立つわけではないが、耶馬溪の自然景観やアクティビティ(登山、キャンプ、サイクリング)とセットで「癒し要素」として機能している。

データからの裏付け(温泉に関連する回答:計17名/291名中)

- ・Q6-1(具体的な目的)で「温泉」を自由記述:12名
- ・Q18(心に残ったグルメ・スポット)で「温泉」を自由記述:4名
- ・Q15(今回訪れた場所)で「温泉」を自由記述:2名
- ・Q16(中津以外で訪れた場所)で「別府」または「由布院」を選択:95名
- ・分析:中津の温泉自体を目的や思い出として挙げた方(計17名)の中には、「なかま温泉」「守実温泉」「金色温泉」などが名指しで評価されており、リピーターに愛されていることがわかります。

一方で、中津観光の前後で「別府」「由布院」といった県内の巨大温泉地を周遊している旅行者が95名(全体の約32.6%)にも上る。つまり中津の温泉は「温泉だけを目的に全国から呼ぶ絶対的エース」というよりは、「中津の自然やグルメを楽しんだ後に立ち寄る憩いの場」または「別府・由布院などの温泉地を周遊する際の中継・比較ポイント」として、観光の満足度を底上げする立ち位置にあると言える。

3.9 中津市役所 企業立地・雇用対策課

● 廃業の理由

事業を廃業する場合の65%が資産超過型、51%が黒字型であり、黒字の場合であっても後継者不足、経営者の高齢化などの理由から「あきらめ廃業」する場合がでてきている。経営者は50代以上が80%となっており、半分以上は後継者がいない状態である。求職者に需要が高いのは事務職などであるため、特に建設業は後継者不足が著しく、59.7%が後継者不在である。

● 事業承継の相手

新任社長の統計では、親族内承継がわずかに減少したものの最多で、企業内昇格が次点である。増加傾向なのはM&Aなどを用いた第三者承継である。廃業を考えていても魅力があつて事業に買い手が見つかる場合もある。中津市では産業の維持を目的に、中山間地域事業承継支援補助金という形で過疎地域でM&Aを除く形で補助をしている。

● M&Aの事例 天雲龍

天雲龍は耶馬溪ダムからほど近いジビエ料理を提供する飲食店である。福岡県出身の20代の男性が承継した。外国人の友人とインバウンド向けの観光業を計画し、近くに1棟貸しの家を所有している。天雲龍はその宿泊者用のアクティビティ・食事提供用に用意した。

耶馬溪地域ではジビエやすっぽんの養殖が行われており、後継者ができるなど活力が生まれれば観光資源としてPRしていける可能性もある。

- 若年層の流出

市内の高校に聞き取り調査を行った所、832名中進学593名、就職239名(うち市内就職33.5%)であった。進学後は進学先の土地で就職するが多い。

- 課題

現経営者は後継者問題を先延ばしする傾向がある。承継は場合によっては5～10年かかるプロセスであり、その間に代表者が体調を崩して意思決定が出来なくなってしまう場合もあるため、早め早めに準備を始めるよう啓発している。

取り組みとして、出張相談会を3回/年程度開催している。また、商工会議所の方が企業を直接訪問する中で必要性が高いと判断された場合は事業承継引き継ぎ支援センターへ紹介・連携している。

3.10 中津市役所 学校教育課

- 教育機関や教育内容について

質問「山間部の小中学生は、どのように通学しているのでしょうか。」

遠距離からの通学の場合は、路線バスやスクールバスで通学している。距離によっては、路線バスの定期代や自転車など通学にかかる費用に対して補助金を交付している。

質問「都市部と山間部では、小中学校の数に差がありますが、一校当たりの生徒の人数に差があるのでしょうか。」

中津市は平成17年の市町村合併で中津・三光・本耶馬溪・耶馬溪・山国の5市町村が合併している。旧中津とそのほか(旧下毛郡)で比べると、小学校の平均で、中津:343人 旧下毛:49人、中学校で、中津:335人 旧下毛:68人。

質問「中津市民の所得状況は、公立と私立の教育機関の設置数や教育内容など、教育との間に何か相関関係はあるのでしょうか。」

相関関係は不明だが、義務教育学校で私立の学校は中津市には存在しない。

質問「児童・生徒と地域住民の関わりを図る取り組みはありますか。」

中津市独自の取組みというわけではないが、学校運営協議会(コミュニティスクール)という制度を全学校が導入し、保護者や地域住民のみなさんが学校の活動に参画できるようにしている。この協議会の委員には、地域住民の方を市教委が委嘱しており、一定の権限と責任を持って、学校の運営とそのために必要な支援について協議している。各学校で

は、特色のある取り組みを行っており、地域の方が登下校の見守りを行ったり、学校内で補充学習の支援を行ったりしている学校もある。

- 外国籍の児童・生徒について

質問「中津市立の学校に通う外国籍の児童・生徒の数は増加しているのでしょうか。」

外国人の人口は増加していますが、増加に対して、日本語指導を必要とする児童・生徒数にそこまでの変化はありません。R4年度で15人、R5年度で13人、R6年度で13人、R7年度で15人です。

質問「外国籍の児童・生徒へは、どのような支援をなされているのでしょうか。」

日本語を話せない園児・児童・生徒に対しては、生活をするために必要な日本語や教科学習などの指導を市が任用する日本語指導員を中心としてサポートしている。

- 県外高等学校との連携について

質問「中津市の上位層や特定の専門分野を希望する生徒や、生活・通学圏の都合上県外の高等学校を希望する生徒が、県外にどの程度流出しているのでしょうか。」

県内の高校に進学する生徒が大半。例年800名弱の生徒が中学校を卒業し、その内、40名程度が県外の高校等へ進学している。内訳は10名程度は国立高専、10名程度は県立(主な理由:学科の魅力)、20名程度は私立(主な理由:部活動)へ進学している。生活・通学圏の都合で県外へ行く生徒は例年いない。

質問「学科の魅力で県外の高等学校を希望する生徒は、どのような学科を目指すのでしょうか。」

入学前にカリキュラム選択をする総合学科が多い。普通科高校から総合学科に変化した学校は大学進学に強かったり、学校による特色があり、目的意識をもって入学する生徒が多い。その他に県外に進学するケースとしては、部活動で福岡の私学を目指す場合や、難関大学進学のために特進コースを希望する場合もある。学校の寮で暮らす場合もある。国公立大学への進学を希望する生徒は公立の普通科高校を選択するケースが多く、私立高校を希望するケースとしては、学業に力を入れたいが、実力と出願の兼ね合いで特進コースを選択するというようなケースが多いという肌感。福岡は制限が特に厳しく、県外の学生は福岡の公立高校に出願することはできない。

質問「中津市の上位層や特定の専門分野を希望する生徒や、生活・通学圏の都合上県外の高等学校を希望する生徒が、県外にどの程度流出しているのでしょうか。」

県外への進学向けというわけではないが、成績優秀者・経済的に困窮している世帯に対しては、中津市奨学金(一般5000円/月額)を贈与する制度がある。

質問「学校教育課の立場として、課題に感じていることはどのようなことでしょうか。」

人口減少が主要な課題。山間部ではとりわけ減少が多い。教育的な面では、少人数は、他者との関わりが特定の人に限られてしまうため望ましくない。

3.11 中津市役所 秘書広報課

【日時】

2月26日(木) 11:30～12:00

【場所】

中津市市役所 3階会議室

【内容】

- 中津市広報について

質問「中津市公式チャンネルお更新頻度やコンテンツ内容については、どのように運営されているのでしょうか。」

月に11.5～12.5本アップしている。視聴回数は、年間で8回程度。登録者数は1885人。ケーブルテレビの映像(下毛地域でしか放送されない。祇園祭、コスモス祭、議会の開会前などを紹介)やワンポイント手話(年1回)、ふるさとCM大賞、各地イベント等の紹介をしている。公式アカウントの管理は広報課。各課が動画の作成とアップロードを行っている。登録者や視聴者の年齢層の分析はできてない。Youtubeの他にFacebook、Xもやっており、HPなどでも誘導している。

質問「Youtubeの宣伝はイベント等でされているのでしょうか。」

力を入れて宣伝はしていないが、コスモス祭でショート動画を作って公開をしている。ふるさとCM大賞でも動画を公開した。

質問「市報なかつ」は、電子書籍版、音声版、点字版、アプリ版など様々な媒体で刊行されており、多様な人の手に届くようになってきていると存じます。こちらはどのような方針で運営されているのでしょうか。」

暮らし満足ナンバーワンという中津の強みを活かしたいと考えている。何か制限をつけることなく、伝えたいことを伝えるようにしている。中津で暮らす様々な人を取り残さないようにしたい。ユニバーサルデザインや分かりやすい言葉遣いによって、市民が読みやすいものになっている。暮らしている人への情報発信なので、健康教室の情報などを載せているが、他の地域も含めた幅広い人に見てもらいたいため、目を引く写真を表紙に扱うようにしている。

質問「市報なかつの内容はどなたが決定されているのでしょうか。」

各課から募り、内容の精査をしているのが広報課である。例えば、子育てのイベントを掲載しようとなった際は、広報課の管轄ではないので、その担当課のマンパワーによる。担

当課の活動をどう推進していくのかを考えていくのが広報課の仕事。子育て向けのアプリを作っていて、そこに向けた情報発信はそちらでやっているの、現状は市報中津に情報を載せなくてもことが足りているのではないかと。出生届提出時や母子定期健診でアプリの情報を提供している。アプリの情報を市報に載せてもいいのではないかと考えている。

質問「公式チャンネルの存在の情報発信はどのようになされているのでしょうか。街中にアカウントの情報をのせること、他の市のアカウントにリンクをのせること、アカウントに誘導する投稿をアップすること等が考えられるのではないのでしょうか。」

instagramは広報課の管轄ではなく、観光課であり、ルールは伝えたくて課で管理してもらっている。広報はfacebook、Xを管理している。紙媒体やHPでの情報発信に比べて、動画媒体で情報発信を行う労力が少ないと感じている。

質問「アカウントの誘導など、課を超えた連携はあるのでしょうか。」

課を超えた連携はしていない。一括にするとその人にとって不要な情報も受け取らざるを得なくなり、イベントの情報だけを見たい人などにとって鬱陶しいという状況にはしたくない。各課でSNS開設の制限はない。広報としては、現状では開設して投稿する労力に対して踏み出せていない状況。広報課では、市民に対する情報提供や市報を活用した内容など、各課が扱っている情報をその課で投稿する必要があると考えている。市のHPに動画を掲載することは、HPの動作上難しく、Youtubeのチャンネルのリンクを掲載している。

3.12 中津市民病院 折田院長

【日時】

2月26日(木) 13:00～13:30

【場所】

中津市市役所 3階会議室にてオンライン

【内容】

- 中津市の医療サービスについて

質問「中津市の中でも、地区によって医療サービスの格差があると感じることはありますか。」

耶馬溪地区は山間部であり、病院まで物理的距離があり、かかりつけ医を担うところが少ない。中津市民病院としては、市が運営する診療所が耶馬溪にあり、医師の数が足りない際に、臨時で応援の医師を市民病院から出している。市を介して市民病院へ連絡が来る。

質問「医療サービスの提供状況と、交通等のその他の地域資源との関連性を感じることはありますか。」

耶馬溪は遠く、救急車を受け入れても30分位かかる。行政が多様な観点から道路整備方法をはじめとした対策を考えている。宇佐市と豊後高田市からも、30分以上かけて患者が来る。時間はかかるが、北九州方面は道がしっかりと整備されている。定期的に来られている方は、交通の整備が十分でないが、利用者が少ないので、バスの本数も増やせない。自治体が病院やスーパーにコミュニティバスを出しているが、車で来られる方が多い。そのため、駐車場を広くしている。

質問「定期的に通院される方で、車を利用する方は誰が運転するのでしょうか。」

本人が運転して来る。高齢者だけの世帯は車がなくなると生活ができない。車で来れなくなったら、在宅医療に移行する。市民病院は在宅医療の機能はなく、在宅に力を入れている病院に中心になって担ってもらっている。ただ癌の治療をしている人は専門の看護師が同行訪問するなどの取り組みはある。

質問「中津市では、医療サービスの中でもどのようなニーズが多いのでしょうか。またニーズに対して、資源が不足していると感じていることはありますか。」

医師に関しては、東北はすごく少ないのに対し、全国的にみると医師の数は多いが高齢化している。一部、耶馬溪は数が少なくなっている。市民病院の意思で中津市出身は70人中5人で、九州大学と大分大学の派遣が多い。中津に単身赴任をしている人が9割で常に若い人(平均40代位)が派遣されることがメリット。クリニックは高齢化が(中央値が63歳)進んでおり、後継の先生がいない。在宅で機動力があって動ける先生の数は減っている。看護師に関しては、訪問看護ステーションが増えている。大分県内に薬学部がないこともあり、病院薬剤師がたりていない。現在いる薬剤師の方は、高校まで大分県内のUターンの方が多い。初期臨床研修制度が入る前は大学の所在地にところに留まっていたが、現在は半分くらいは県外にでている。今のところは東北と比較するとまだよいという状況で決して医師が足りている状況ではない。

質問「大分県では宿泊費や交通費が補助されるが、広く県外から受け入れたいという状況なのでしょうか。」

臨床研修医は中津・大分県出身の人が結構来てくれるが、高地大学、熊本大学、宮崎大学の学生もいる。就職する人は、中津出身の人は少ない。生活圏ができてしまうことが要因と考えられる。由布市や大分市などで子どもを生んでしまうと、そこから離れて中津市にくるとするのが難しい。

質問「中津市内の産科がある病院・クリニックは2か所しかないようですが、足りていないと感じることはありますか。」

中津市内では産科クリニックと中津市民病院の2箇所のみ。市民病院は周産期母子医療センターであり、ハイリスク分娩を受け入れている。豊後とか高田からも患者がやってくる。異常が起こった時に、大分市などに運ぶ余裕がないため対応できるようにしている。無痛分娩に対しては、硬膜外麻酔でやりたいが手が回らないため、他の麻薬を使った分娩を

行っている。不妊治療もやっている。カバーできないものは、大分市に行く人もいて、つなぎをしている。若年人口の減少に伴い、分娩数は減っているため、新たなクリニックが必要かというところではない。産科医が5人のみで、手一杯の状況。

質問「市民病院で提供しているまた、2つの病院・クリニックで提供していない医療を受けた人は、県外に出る人が出てくるのではないのでしょうか。」

市外に行く場合としては、麻酔が大量に必要な場合や整形外科の緊急手術が必要な場合(常勤医がいない)、脳外科の院内で対応できない場合(脳外科が一名のみ)があげられる。10名程度の医師が勤務する整形外科病院が病院が近くにあるが、内臓損傷のある多発外傷だと整形外科病院がみられない。一方で市民病院にも整形外科医がいないため、複雑な内容であれば大きい病院に送らざるを得ない。脳神経外科医もおらず、麻酔科医も少ない。

3.13 中津市役所 まちづくり推進課

【日時】

2月26日(木) 13:30~14:00

【場所】

中津市市役所 3階会議室

【内容】

- 空き家について。

中津地域に市内空き家の約73%が集中しているというデータがある。

質問「空き家バンク制度は、移住・定住促進のみならず、就労支援(就労の場の創出や起業支援等)としても活用されているのでしょうか。」

空き家バンクは住まいの紹介がメイン。ただし間接的に働くのを助けている。就労支援との横の連携ができていないのが現状。就業に関連した事例としては、山国町にきた企業の従業員用の社宅としての空き家活用があるが、まだ数字は算出していない。

質問「中津地区において、空き家数に比して空き家バンクへの登録や制度の活用が十分に行き渡っていない状況はあるのでしょうか。」

空き家バンクの登録が進みにくい。要因としては、空き家バンクを介さない市場流通の存在が第一にある。5つの地区に分かれているが、中津の大多数は民間で流通されている物件。その他の要因として、田舎特有だけど、自身が生まれ育った家/物置として利用しているなどの理由から貸し渋りをする活用の心理的障壁、空き家バンクの基準を満たさない、空き家のコンディションの悪さがあげられる。

質問「空き家バンク登録の基準を満たさない物件はどうなるのでしょうか。」

空き家特措法により、持ち主に対して改善・助言指導をすることにはなっているが、最近では所有者不明のことが多い。江戸、明治時代生まれの人が所有者で、そこから相続されていない場合があるが、今の子孫に対応を求めても対応が難しい。中津に住んでいるならまだしも、関東関西にいてルーツがあることを全く知らない人もおり、中々実際動いてもらえず、相続放棄することが多い。そうなった場合は、危険が迫ってきたら所有者不明なら公費で安全を確保しなければならないが、財政的に厳しいため、数を絞って真に危険な物件に対してのみ対応している。去年は2軒崩れそうな物件があったため、壊してブルーシートを被せるという緊急的な安全措置が行われた。中津市の空き家の件数が3091件あるうち、何かしらの対応を要する物件は700件程度で23～4%である。

質問「空き家バンクを活用することの利点と欠点としては、どのようなことがあげられるのでしょうか。」

空き家バンクに登録している人及び空き家バンクを介して購入する人が対象の支援制度を活用できる点が利点。家財処分に要する費用を補助(10万円)する登録推進補助金や改修費用の補助を行う空き家改修事業補助金(費用120万円に対して、上限50万円/費用80万円に対して40万を補助)がある。また、普通の民間会社は取り扱わないような、山間部に位置する物件や古い物件を登録できる。空き家バンクの制度は市が業者に委託しているため、行政が間に入っているという点で買い手にとっての安心感もある。一方で、一部だが行政が入っているために、過度な要求をしてもいいんじゃないかというモラルハザードが起こることもある。

田舎暮らしをしたい人が空き家バンクを活用して居住してくれるのが理想だし、それが通常の形。通常の物件に比べて安いので、住み替えの利用もある。

質問「空き家バンクに登録する方はどのように情報を得て利用されるのでしょうか。」

一般的に空き家バンクの認知度が上がった。制度について自主的に調べる人が多い。不動産屋さんにも相談するより、一旦市に相談する方が若干ハードルが低い。東京に住んでいる人が、中津に来て中津の不動産屋に相談するというのはハードルが高い。

質問「空き家バンクの活性化、空き家の減少のためにはなにが必要だと考えていらっしゃいますか。」

空き家関連の指定法人があり、民間のノウハウを活用して空き家対策を進めていこうというプロジェクトに参加していきたいと考えている。民間だとスピード感がある。市役所では現実的ではない価格設定をする住民に対し、民間ほど強く助言することができない。空き家バンク制度は、あくまで場の提供であり、評価する立場ではない。専門性がないため、アドバイスもできず、売買されない物件が残っている。専門家が間に入ってくると良いかも知れない。空き家自体を減らすのは難しいため、いかに増やさないかも重要。現実的には人口が減っているから町を小さくするのが本来的なタイムコース。新築住宅を優遇しているが、国制度が利活用に対して注目できていない。

3.14 中津消防署

【日時】

2月26日(木) 13:30～14:00

【場所】

中津市市役所 3階会議室

【内容】

- 中津市の消防について

質問「中津市の山間部には、消防署が一か所しかありませんが、中津市の広い山間部の消防をどのようにまかなっているのでしょうか。」

消防団係を担っている方によってまかなわれている。山間部では林野火災が懸念であり、予防のためにHPやメールで注意喚起を行っているほか、地域に活動に行った際にも説明をしている。また、距離は遠いが分署も設置している。最も現場の近くにいるのは消防団であり、山間部であればあるほど外れた地域であるという自覚があるので、消防団の方々の意識が高い印象がある。実際、以前家屋火災が発生した際に初めに対応したのは地元の消防団であった。しかし、消防団の人数は減少しており、少ない人員でどう対応するのかという点が課題になっている。

質問「消防に関して、中津市の特徴はなにかありますか。」

全国的にみて、消防団に加入するのは自営業で常に家にいる方が大半であった。しかし、最近は自動車関連に従事する方も増えていて、日中外出しており、夜勤もあるという方が団員になっている。そこで、消防団の定年は60歳だが、元気に働ける方は60歳を超えても体力・技術がある人は日中に火災があった時に備えてもらっている。消防団員が出動した時も半数が高齢の方であった。

質問「消防団へ入る方は、どのような思いをもって入団されているのですか。」

知り合いづてで加入することが最も多い。地域のことは地域の人でまかなうべきだという思いや地域に貢献したいという思いで加入する方もいる。団員同士の深い繋がりがなければ、入団してもらうことには難しさがある。

消防団の高齢化・団員の減少により、消防団の統廃合が起こっているとのことであったが、統廃合に関しては団員同士の話し合いを尊重しているそうで、そこには、地域のことは地域の人が最も詳しいという考えがあるからだそう。例えば、地図では近い距離にある場所でも、実際は山の下を経由する必要があるために交流が少ないといった地域の外の人では分からない部分がある。

3.15 中津市役所 総合政策課

【日時】

2月26日(木) 14:10～14:40

【場所】

中津市市役所 3階会議室

【内容】

- 人口減少対策について

質問「資料を拝見し、中津市では人口減少および若年層を中心とした人口流出傾向が続いているのではないかと考えています。若者が県外の高等学校・大学へ進学することや、進学後に県外で就職することが、人口流出の一因となっているのではないかと推察しておりますが、市としてはどのような要因が人口流出の主な背景であると認識されているのでしょうか。」

中津市では約83000人の現状の人口から減少していく推計であるが、最新の推計は以前の推計よりも人口減少が軽減しており、10代の転出超過があるがその後転入超過している。ダイハツの工場といった働く場所があることが要因だと考えられる。人口減少を食い止めるというよりも適応する必要がある。若者が地方から流出する要因として、雇用機会の不足(安定性、賃金で魅力的な企業が少ない。)、教育機関の不足、生活の利便性、娯楽や文化施設の不足、古い価値観や性別役割意識からの敬遠があげられる。居住地を選ぶ際には多くの要素が要因しているため、まちの総合力が問われる。都市機能充実を目指すのではなく、中津の強みや独自性を活かす対策が必要であると考えている。中津の移住・定住関連施策として、移住・空き家利活用に対する支援、経済的支援、奨学金返還支援、過疎地に対して結婚新生活支援補助、高校通学補助、事業承継を行っている。

質問「経済的支援のインセンティブの程度、すなわちお金があるからやってくる人はどれくらいいるのでしょうか。」

結局この土地が気に入っているから中津に来るのであって、結果として補助金をもらえたからラッキーだと思うくらい人が多い。

質問「地方創生を進めるためにはどのようなことが必要となってくるとお考えでしょうか。」

人口減少の実態把握、若者の価値観への適応、仕事がある、北九州に近い等の中津の独自性が重要なポイントであると考えている。人口減少を前提として、何ができるのか、例えば、中津では女性の増加が少なくなってきたという状況を把握した上で、地方には男女の役割意識が残っているのであれば、若者に寄り添う価値観を認められるまちであるべきであると考えていく。

3.16 大分県立中津南高等学校

【日時】

2月26日(木) 15:30～17:00

【場所】

大分県立中津南高等学校 教室

【内容】

● 基本情報

1学年約200人で、倍率約1.2倍の一般入試による入学者と10名程度のスポーツ推薦による入学者が在籍している。男女比は学年によりばらつきはあるが概ね半数ずつである。理系は男子が多い。2年生以降に大學受験館カルタス、明光義塾などの学習塾に週2～3回程度通う生徒が多い。大学に進学する生徒が多い。現在は2年生から文理別だが、次年度から2年生までは文理を分けない制度へ変更予定である。

● 将来について

質問「高校はどのように選びましたか。」

市内には偏差値が高い南高校の他にも北高校、東高校、私立の東九州龍谷高等学校がある。東高校は商業に強く、就職に有利な高校である。中津で勉強ができる中学生は南高校を第一志望とし、併願で北高校や東九州龍谷高等学校の特進コースなどを併願する人が多い。南高校より偏差値が高い学校に行こうとすると上野丘高校になるが、一人暮らしになってしまう。スポーツで県外に進学することはあるが、勉強で選ぶ人は少ない。

質問「志望している大学とその理由を教えてください。」

話を聞いた5人の生徒のうち、高校2年生の3名は県外へ進学し、一人暮らしをすることを希望していた。高校1年生の2名はまだ志望が決まっていないとのことだった。

- ・熊本大学(九州大学に次いで偏差値が高い。半導体が強い)
- ・広島大学(薬学や教育が強い)
- ・佐賀大学(地元。理工学部に興味がある)
- ・山口大学、鹿児島大学、大阪大学(獣医学部がある国公立。)
- ・県の推薦を使う場合は卒業後大分県に戻ってこないといけない場合もある。
- ・私立は経済的に難しいため公立を志望している。
- ・東京なら私立を選ぶ人が多い。
- ・何となく九州を出たいと思っている。

質問「大学進学後はどうしたいですか。」

大学進学後は中津には戻らずそのまま県外で就職したいと全員が希望していた。理由としては、中津にはダイハツはあるが、専門職や薬学系職種、研究職といった進路の選択肢

が非常に限られており、県外の方が職種の選択肢が多くより高い収入が見込めるということが挙げられた。将来は獣医師やJR職員を志望する生徒もみられた。

質問「どのような通学手段で通っていますか。」

自転車が4人、歩きが1人。自転車は15分～30分程度。中には三光から自転車で40～50分程度かけて通っている人もいる。耶馬溪から通っている人も1学年3～4人はいるが、バスを利用している。女子生徒では親が送迎している場合も多い。

中学校は学年に200人程度おり、宇佐が4校、中津が5校ある。福岡からも通ってくる。

- 中津市について

質問「市報なかつを知っていますか。」

母は「スマイル」を読んでいる。書道をやっていたのでタイトルの文字を書いたことがある。中に何が書いてあるかはあまり知らない。知り合いが出ていれば読むと思う。

祇園祭、桜祭、コスモス祭などのイベントの情報は親や友人経由でいつの間にか知っていることが多い。学校の配布物にお知らせが掲載されている時もある。女子はinstagramで情報を収集している子も多い。

質問「観光要素のからあげ、ハモ、温泉(その他観光要素)は、どのような印象がありますか。」

からあげはお気に入りのからげ屋でkg単位で購入し、常時食卓に並ぶ。唐揚げフェスにはたまにいく。中津城や福沢諭吉旧宅は小学校の街並み体験で行く。地元について聞かれればそれらの観光要素について紹介するが、思い入れはない。コロナ前は家族で中津の温泉に行っていた。

休日は小倉、大分などに遊びに行く。大分では県主催の大会が開催されることが多い。

質問「休日は何をしていますか。」

自習室に週1～2回行って勉強している。遊ぶ時は体育館を借りてバレーをしたり、カラオケやマックに行くことが多い。

質問「外国人との交流はありますか。」

基本的にはない。1人の生徒がよく話しかけるとのこと。工場帰りに音楽を流しながら自転車で通りすぎていくイメージ。

3.17 地域包括支援センター三光園

【日時】

2月27日(金) 9:00～1:00

【場所】

地域包括支援センター三光園

【内容】

- 地域包括支援センターについて

質問「地域包括支援センターでは、実際にどのような悩みや相談を受け付けることが多いですか」

利用者本人、家族、委託先のケアマネジャー、行政(窓口、警察)、医療(病院、クリニック)、地域住民、民生委員、社協(あんしんサポート事業、生活困窮)、オレンジカフェ、週一体操教室などからの相談が多い。以下、相談者別の相談内容。

利用者本人、家族：総合相談で介護相談が多い。外出の機会や運動の機会が減り、閉じこもり勝ち。筋力低下が目立つようになった。転倒が増えた。住宅改修で手すりを付けたい。物忘れが増えて、認知症が進行するのが心配。家族が遠方で見守りがなく安否確認が必要。低栄養や食事に課題があるケースでは、配食サービスの提案。家族に精神疾患の方がいて、対応が難しい。施設入所希望時は、介護度に応じて、有料老人ホーム、サービス付き高齢者向け住宅から、老健、グループホーム、小規模多機能、特養などを提案することが多い。

地域(委託先)のケアマネジャー：生活困窮、ごみ問題、猫の問題、利用者のお金の管理、虐待の疑われるケース、身寄りがない、認知症があるが本人が認めず受診につながらない、介護保険の制度のこと、レセプトについて、ケアプラン作成などについて。

行政：介護長寿課の窓口に来られた方の相談をより詳しく聞く。必要があれば、申請代行。虐待案件では、警察から高齢者福祉係を介して、緊急対応することもあり、一時的な避難ができるように、施設入所の調整を行ったり、介護相談から介入したり、ケースによって対応が違う。医療保護入院の必要性があれば病院との連携で、受診につなげたりすることもある。配食サービス(市のサービスが存在)、緊急通報電話などの申請に係る実態把握の依頼。

医療(病院)：ソーシャルワーカーからの電話相談がある。入院中の方で、退院後の生活に不安がある場合など。退院に合わせて住宅改修で手すりを設置してほしい。退院後、リハビリのためデイケアやデイサービスに行けるよう調整してほしい。お薬の飲み忘れがあるので、訪問看護を入れてほしいなどの相談があり、申請代行から介護保険サービスにつなげる。受診時に、認知症が疑われ、家族との関わりが不明な時など、様子を見に行ってもらいたいと連絡がある。

医療(クリニック)：医師より直接電話相談がある。「受診に来ているけど、説明しても理解してもらえない。心配だから一度自宅に行って様子を見てほしい」「薬が飲めていないようだから、自宅に行って、現状を確認してほしい」といった内容で連絡があり、実態把握し、必要があれば介護保険サービスにつなげる。

地域住民：「近所の高齢者に、お金を貸してほしい」と言われた。ゴミ捨て(分別)ができていない。被害妄想(臭い、毒をまく、盗まれる)。「認知症が気になる人がいるので、様子を見に行してほしい。」「子供から虐待にあっているのでは？」と連絡がある。

民生委員：「独居の方で、物忘れがある。心配なので見に行してほしい」と、民生委員と一緒に同行することもある。また、民生委員からの通報と気づかれないうちに、「高齢者の実態把握のため訪問しました。」と説明し、市のパンフレットを持っていくなど、配慮している。配偶者が亡くなり、独居になった方には、愛の訪問事業(ヤクルト)の申請をお願いしたりすることもある。毎月開催の民生委員定例会に、ほぼ毎回顔を出し、「介護予防通信(毎月1日発行)」を持参。介護予防の周知や、情報発信、顔の見える関係づくりを行っている。

愛の訪問事業(ヤクルト)：安否確認も兼ねて、2日に1回ヤクルトを届ける。中津では民生委員が申請することになっている。

社協(あんしんサポート事業、生活困窮)：生活福祉資金の貸し付けを行った方で、介護が必要な方がいるので様子を見に行してほしい。担当利用者であんしんサポートを利用している方で、情報共有をしている。

オレンジカフェ：月一回、併設する特養の地域交流スペースで開催している。認知症に関する相談が多い。

週一体操教室：参加者から、心配事についてなど

質問「高齢者や後期高齢者の割合は、全国平均より高いですが、それを実感するような出来事がありますか？」

包括三光園の担当地区は4地区／15地区。高齢者人口 約6500人、高齢者率 31%、認定割合(要支援・要介護)約18%。中津市には、全部で5つの包括がある。市内と山間部のように地域差はあるが、包括三光園では、毎日のように新規の相談がある。生活困窮や虐待の相談も年々増えており、「8050問題」も多く、家族が精神疾患を患っているケースも増えている。また、家族がいるけど疎遠になっているといったケースも多くなったと実感している。違う視点でいうと、令和8年1月末時点で中津市人口81156人、100歳以上が77人、90代 2044人、80代 6550人と、元気な高齢者が増えていることも事実。週一体操教室や健康講話、食生活改善推進員による男性料理教室、地域の飲食ボランティア、地域サロンなどが増えて健康への意識も高くなっていることも要因だと感じる。大分県公式健康アプリ「あるとっく」などを使っている高齢者もいる。

- 夜間対応可能な在宅療養診療所・病院がないことについて

質問「夜間に体調を崩された方がいらっしゃった場合は、どのような流れで対応されていますか？その際、地域の特性で困っていることはありますか？」

リスクマネジメントとして、必要な方には緊急通報電話の設置を提案している。固定電話があることが条件となるが、ボタンを押せばコールセンターにつながり、事前に伝えておいた病気のことや緊急連絡先、近くの協力員などに連絡し、緊急時の対応をしてくれる。救急車への通報も可。

自分で電話をかけることができる場合は、包括であれば夜間、休日転送で緊急時の対応が可能。基本、家族につながぐが、緊急な時は救急車に連絡したり、担当ケアマネに連絡を取って、家族にお願いすることもある。

訪問看護や定期巡回サービスなど利用している利用者については、直接サービス事業所に電話をすることもある。

地域の特性で困っていることは、あまり感じていない。救急隊も早い到着ができるように、本署から出て、待機しているなど工夫している。近隣地域(宇佐市、豊前市)にはない。定期巡回サービスについても、中津市では2事業所があり、夜間の緊急対応にもヘルパーや訪問看護が連携して対応してくれている。

質問「ご自宅での看取りを希望される方に対して、どのような支援や調整を行っていますか。」

訪問診療と訪問看護で連携する。本人や家族の意向をサービス担当者間で共有する。「人生会議」や「私のおもいちょっとだけシート(右図)」の説明。一緒に記入することもある。

本人に加え家族の介護負担も軽減できるよう、環境面(ベッドの設置、手すりの設置、ポータブルトイレの購入など)を整えること。オムツなどを使用する場合は、使い方の説明や、種類の情報提供など行う。介護タクシーや福祉タクシーなど移動についての情報提供や、緊急時の対応や流れの説明も予測して支援している。

質問「夜間医療が手薄なことに比例して、家族のレスパイトなどのニーズは高いのでしょうか？」

痰吸引が必要な方などは、家族の負担が大きいと感じるだろう。負担が大きい方は、定期的にショートステイを利用し、入院など、ケアマネが調整して、家族の負担を軽減している。

夜間医療が手薄と感じてはいない。訪問看護と連携し、必要があればかかりつけの先生が訪問もしてくれている。訪問看護の事業所も増えていて、専門性も高く、頼りになる。

中津市民病院や中津胃腸病院に緩和ケア病棟もあり、家での看取りが不安な方も、ぎりぎりまで自宅で過ごし、最期は緩和ケアに入院するといった流れもできていて、本人や家族の意向に添うことができていると感じている。

定期巡回サービスもセットで利用できれば、緊急時はコールボタンで対応も可、訪問看護やかかりつけの医師とも連携がとりやすい。

- 地域づくりについて

質問「現在の中津市には、どのような課題があると考えていますか？また、それに対して具体的な対策など検討していれば、教えていただきたいです。」



ヘルパー事業所の縮小や閉鎖があり、ヘルパーが不足している。働く人がいない。人材不足。

週一体操教室の立ち上げについて、高齢者人口の10%の方が通える住民主体の通いの場を作る目的で、100か所目標として、立ち上げ支援を行っている。介護予防の観点はもちろん、介護サービスを卒業した方の受け皿にもなりうることから、立ち上がっていない地域に早急に立ち上げたい思いがある。リーダーになってくれる方と出会うためにも、地域住民とのネットワークの構築が重要で、地域包括支援センターにとって、生活支援コーディネーターの存在はとても重要となっているが、担当している4地区のうち1地区しかいない。募集は社会福祉協議会が行っている。

移動手段がなくて困っている。タクシー料金が高すぎる。コミュニティバスが通っている道路まで出るのが大変といった課題がある。対策として、移動支援の研修や、関係機関、住民主体の活動団体との協議で、地域課題について考える場がある。

質問「センターに相談に来られないような孤立している高齢者をどのように見つけ、多職種と連携していますか？」

令和7年度から「高齢者の保健事業と介護予防の一体的実施事業」保険年金課による高齢者に対する個別支援(ハイリスクアプローチ)を行っている。

具体的には、「検診受診者のうち身体的フレイル該当者への訪問」「骨折既往者への訪問」「高血圧、糖尿病の療養中断者への訪問」「健康状態不明者」の自宅を訪問し、本人と面談。状態をみて、介護サービスにつなげた方がいいと判断した場合、包括支援センターに連絡がある。調査を行った保険年金課の保健師と同行し自宅を訪問。面談する。

愛の訪問事業(ヤクルト)から対象者がいた場合、高齢者福祉係、そして包括支援センターへ。配食サービスの実態把握訪問時に介護サービスが必要な方に提案。民生委員からの情報提供。

地域のネットワーク協議会に参加し、日頃から地域住民とのかかわりを持ち、対象者がいた場合は、連絡をもらう。フェスで介護保険コーナーを設置し、ヤングケアラーや介護保険外のサービスについて周知。

地域の防災訓練、防災会議への参加。在宅医療・介護連携推進事業では「人生会議」や「私のおもいちょっとだけシート」の普及啓発を通じて、連携をとっている。年に数回、医療系、介護系併せて事例検討会を開催。多職種で事例を検討し、交流を深めている。

地域ケア会議を月1回開催。ケアマネが事例を提供し、サービス事業所と多職種で検討する場を設けている。多職種の内訳は、市内医師、(精神科医師、薬剤師、訪問看護、認知症介護指導者、理学療法士、作業療法士、歯科衛生士、管理栄養士、主任介護支援専門員、社会福祉士、保健師、看護師など

事例について、多職種からの見立ての違いで、新たな視点を発見し、ケアマネジャーのスキルアップにもなり、困難事例は特に、ケアマネジャー一人で抱え込まないように、多職種で支え合うことを大切にしている。

4. アクションプラン

4.1 アクションプランに至るまで

以上のフィールドワークを通じ、我々は人の良さ、観光名物の多さ、地域活動の活発さに中津の魅力を見出した。一方で、住民の方へのヒアリングにより、中津の住民は私達のような地域の外から来た人に比べて、中津の良さを実感していないのではないかと、特に若者の中津への愛郷心が足りていないのではないかとという考えに至った。そこで、今回の実習で見てきた中津の良さを伝える仕組みの課題を改善し、若者に中津の良さを認識してもらうことで、地域の活性化を図るアクションプランを考え、提案した。具体的な内容は以下のとおりである。

4.2 具体的なアクションプラン

我々が提案したアクションプランは、中津市のinstagramアカウントの改善である。現状の中津市の広報媒体について、私たちが考える利点・欠点を整理すると次のようになる。instagramについては、中津市観光PRパーソンの運営アカウントは、地域の若者主体の運営である一方、更新頻度が少ない状況であり、「移住のすゝめ」という地域外の人向けのアカウントは需要にあった移住検討者に役立つ内容である一方、フォロワーの数が少なく、移住地として中津という具体的な地域の存在を知っている人といった興味をもった人にか情報が届いていない印象があった。中津市公式Youtubeについては、登録者及び更新頻度も多い一方で、ケーブルテレビの内容を引用するなど内容が若者向きではない印象であった。市報なかつについては、広く読まれている一方で、他の媒体での宣伝が少なく、その影響力を活かしきれていない上、子育て世代向けのイベント情報など、若者向けの内容を望む声があがっている状況であった。まとめると、コンテンツが多いことで、情報の受けてが混乱してしまうこと、複数のアカウントを動かすマンパワーが不足していること、各アカウントが連携できておらず、一つ一つのアカウントの発信規模が小さいことが課題としてあがられると考えた。

この状況に対して、若者が惹きつけられるinstagramアカウントに一本化することが効果的であると考えた。運営は地元の若者が行い、若者向けコンテンツとしてショート動画を積極的に作成するというものである。

この改善によって、①各課の管理の負担軽減という利点がある。お話を伺う中で、情報発信するSNSアカウントの運用の状況は、その課のマンパワーによるところがあるという声があったため、一元化することでその負担を軽減したいと考えた。若者が地域づくりに参画し愛郷心を高めるという点で、地元の若者に運営を任せたいという考えがあったが、現実的に地元の若者のみによる運営、活動の進行は難しいところがあるため、ある程度発信力を持たせるという点で大元の管轄役を市の特定の課が行い、動画作成は地域の若者が行うという形が望ましいと考えた。

次に、②各課の枠組みに囚われないコンテンツが可能になるという利点がある。各課の取り扱い範囲を意識せず、若者に内容を一任するため、各課の枠組みの制限なく、自由な

内容のコンテンツを投稿可能となり、子どもを連れていく地域のイベントや中津のお店の紹介など様々な情報を扱える。前者は高校生も参加したいようなイベントであること、後者は観光要素でもあり、市民にとっても知りたい情報であることもあり得るため、対象の細分化は必ずしも必要ではないと考えた。

そして、①②により、様々なトピックについて扱えることや各課のマンパワーに依存しないことで、更新頻度が上がり、情報を継続的に発信でき、単純にアカウントが一つになることで、様々な情報を得たい人が同一のアカウントをフォローすることになり、フォロワーの数が増加する。⇒フォロワーの数が増えると、「おすすめ」の画面に表示されやすくなり、発信力があがる。⇒フォロワーが多いと、社会的証明による安心感やみんながフォローしているからフォローしようという同調効果により、フォローする人が更に増えるという好循環が期待できるのではないかと考えた。さらに、フォローすべきアカウントの迷いが無いという利点もある。各課でアカウントが分かれていることは、得たい情報が定まっている一部にとって、必要な情報のみを受け取れるというメリットがある。一方で、得たい情報が定まっていない人やそもそも情報を得たいという意識がない人にとっては、アカウントが複数あると、どれをフォローしていいのかわかりにくいという欠点もあると考える。一元化することで、そのような層への情報発信の経路を獲得できるうえ、得たい情報が定まっている人であっても、中津の魅力についての情報であれば、鬱陶しくてフォロー解除ということにはなりにくいのではないかと考えた。

上記の効果によって、フォロワーの数が増え、より多くの人に中津の良さが伝わることで、長期的には、進学や就職で県外に出られた方が中津が好きだから戻ってこようと思えば、Uターンが増え、地域の活性化にも繋がるのではないかと考える。

5. 活動を振り返って

5.1 泉知花(医学部5年)

私が中津市における実習で学んだことは、医療とは地域に広く深く浸透しているものであり、病院の中だけに留まっているものではないということである。私は全塾の体育会を引渡し臨床実習に移行していく中で、自分が医療という狭い世界に入っていく感覚があった。しかし、中津市で実習を行わせていただき、市役所の多機関の方々や地域で活発に活動している方々など、医療機関以外の多くの方々からお話を伺い、大局的な視点を養うことができたと感じている。医療サービスとは地域の人々の健康や幸せを実現するためのものであり、医師には盲目的に自分の前に現れた患者さんだけを見ていては果たせない役割があるのではないかと感じることもできた。産業医や医系技官など広い人口を相手にする仕事に就けなかったとしても、このような視点を常に頭の中に置いておくことで、患者さんの人生を中心にした医療を行いたいと感じた。

また、中津市の方々の人の良さには心から感動した。私はこれまで東京から出たことがなく、グローバル、海外といった単語に漠然とした憧れを持っていた。しかし今回の地域診断では、中津市の方々の温かさや優しさに触れ、そしてその人達のためにやり甲斐と責任感を持って仕事をしている方々からお話を伺うことができた。その中で、自分が住む地域のために生きることも一つのとても充実した人生だと感じ、自分の進路について新たな選択肢を持つことができた。

5.2 渡邊怜(看護医療学部2年)

私は、今回の実習を通して、地域診断において地域の住民の方々の声は非常に発見の多い重要な材料であることを学んだ。実際、様々な分野の方にお話を伺う中で、中津の良さをあまり認識していないと思われる声があがるという共通点があった。また、地元の高校生の声から、漠然と県外に出たいという思いを抱いている学生の存在や、進学で県外に出た後に中津に戻らないことは珍しくはないという意識があることを知った。これらの声が、住民に中津の良さをより認識してほしいという思いや、若者の愛郷心を育み、進学に伴い流出した人々のUターンが増えれば、地域の活性化が期待できるのではないかというアクションプランの基礎となった。上記のような、“地域の人の声”というものは、保健師活動での住民の声、病棟での患者さんの声でも同じことが言えると考えます。今回の経験で得た学びを活かし、“人々の声”に目を向けられる看護職となれるよう精進したい。

6. 発表資料



スケジュール(2/22-2/28)

	2/22	2/23	2/24	2/25	2/26	2/27	2/28
午前		中津城 福沢諭吉旧宅観光	社会福祉協議会	青年会議所 地域振興・広聴課 総合政策課	防災危機管理課 農政課 観光課 企業立地・雇用対策課 学校教育課 秘書広報課	地域包括支援センター 三光園	最終発表会
午後	到着	耶馬溪観光	社会福祉協議会 市長表敬訪問 中津市外国人総合相談センター	七音保育園	中津市民病院 まちづくり推進課 中津消防署 南高校		発表準備



医療

行政

フィールドワークを通して学んだこと

若者の声



地域活動

医療

【中津市立市民病院】折田院長

- 全国平均と比較して医師数が極端に少ないわけではないが、不足はしている
- 中津市民病院は、大学からの医師派遣を中心に若手医師が多く、継続的に高度医療を提供できる体制が整っている
- 開業医の高齢化が進行している
- アクセス：
 - 山間部から病院までの道路整備が課題
 - 高齢者にとって車以外の移動手段が乏しい
- 市民の声：医療機関数は人口規模に対して不足していないが、医療の選択の自由はない

地域活動の場

【地域サロン すずめの家】皆様

- 女性の利用者「家にいたら寝て起きてだけの生活で、貝が殻を閉じるように人と喋らずに過ごしたの。でもここに来られて毎回とっても楽しいわ。ご飯も美味しいしね」
- 男性の利用者「男は取り留めなく話すっていうのは苦手だな。でも聞いているだけでなんか元気になるよね。僕はファイルに貯めてた唄をPCでまとめる作業を担当してるんだ。他からも誘いが来たけど断っちゃったよ」
- 吉田日出子さん「誰かにやってって言われてやるのは当たり前。自分からやった方が気持ちが入るでしょ」
- ボランティアの方々「自分が楽しんでやることと、各々が自分のできることをやれば良いっていう気持ちが大切」

03地域診断とは？

- Step1: 既存情報を集める(統計・調査データ)
- Step2: 仮説を立てる
- Step3: フィールドワークを行う(地域の視察・インタビュー)
- Step4: 地域アセスメント(情報分析、課題特定)
- Step5: アクションプラン

「中津市はどのような町で、
地域住民がさらに健やかに住み続けるためにはどうしたらよいのか」

03地域診断とは？

- Step1: 既存情報を集める(統計・調査データ)
- Step2: 仮説を立てる
- Step3: フィールドワークを行う(地域の視察・インタビュー)
- Step4: 地域アセスメント(情報分析、課題特定)
- Step5: アクションプラン

事前にオンライン
で行った

↑ 現地(中津)で行った

事前学習してきたこと

- ★ 様々な側面から中津について調べ学習
 - 医療、教育、人口動態、経済など
- ★ 我々の仮説
 - 「若者は流出しているものの、活発な地域活動や交通網の発達により、大人が住みやすい町になっているのでは？」

➡ 現地実習のフィールドワークを通じ、この仮説を検証する

04

フィールドワークで学んだこと

市役所

【農政課】加来さん

- 中津は果樹園もあり、フルーツロードがある。山国では評判の良い梨、旧中津ではブドウを作っている。裏作として、旧中津と三光は麦、本耶馬溪は蕎麦の産地である。
- 新規就農する人に向けて、農業研修を行っており、補助金が出る。

【観光課】大畑さん

- 公式アカウントでは特定の店舗やスポットを目立たせることが難しいという側面がある。
- ハモ料理店を訪れた人の半数以上が、ハモの美味しさを綴っている。
- 「はも料理の美味しさに感動しました。」

市役所

【企業立地・雇用対策課】江藤さん

- 耶馬溪地域ではジビエやすっぽんの養殖が行われており、後継者ができるなど活力が生まれれば観光資源としてPRしていける可能性もある。
- 経営者は50代以上が80%となっており、半分以上は後継者がいない状態である。

【総合政策課】田中さん

- 居住地の決定には多くの要素が影響するため、まちの総合力が問われる。中津の強みを絡めながら、定住人口の確保に向けて取り組みたい。
- 中津が気に入っているから来るのであって、結果として補助金をもらえたからラッキーだと思ってしまう人が多い。

市役所

【学校教育課】折元さん

- 県外の公立高校は学科の魅力、私立は部活動を主な動機として選択されている
- 海外から来た子供が日本で生きていくために、日本語指導員が生活習慣も指導する

【秘書広報課】矢野さん

- 市報なかつや、約1900人の登録者がいる中津市公式チャンネルを運営している
- 広報課は各課で作成した動画を精査はするが、内容について決めることはない
- instagramは広報課からルールを周知した上で各課ごとに開設する。内容が混ざると必要な情報も流れてきて鬱陶しくなってしまうため、課を超えて連携はしていない
- 大画面に表示する動画や広報課独自のinstagramアカウントの作成はマンパワーが不足しており難しい

市役所

【中津消防署】宮野さん

- 林野火災が発生した際に一番近くにいるのは消防団
- 今は自営業以外の人でも消防団に入るので日中家にいないこともあり団員の年齢層が上がっている

【まちづくり推進課】梶谷さん

- 山間部にある、築年数が経っているなど民間の事業者が手を出しにくい物件の持ち主にに対し、空き家バンクという空間を提供し、購入者へ繋げる
- 持ち主が対応しない場合に緊急的な安全措置を講じる
- 空き家バンクの登録が進まない
- 人口が減少していく中で空き家ゼロを目指すのは難しい。いかに増やさないか

子育て世代の声

【七音保育園】職員・保護者の皆様

中津市の情報収集は？

- 市報なかつは目を通すが、活字だと読むハードルが高い。
- 子育ての情報や子どもも参加できるイベントの情報が載っていたら見ると思う。
- 今はインスタグラムでイベントの情報を得ている。

中津の良いところは？

- 大真公園や米山公園など、大きい公園が最近整備されて、遊ぶところが多い。
- 中津市のよいところは、あまり分からない。

地元の高校生の声

【大分県立中津南高校】生徒会の生徒様

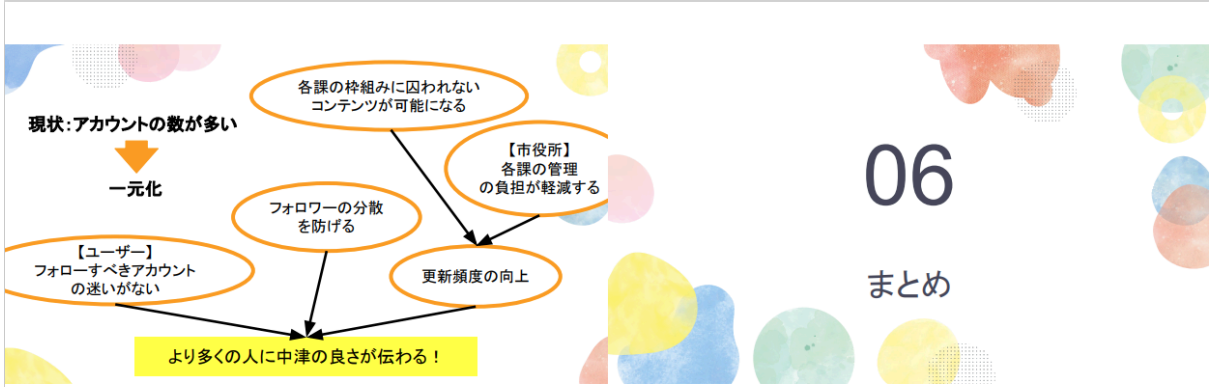
- 市報なかつに何が書いてあるのかはあまり知らない。知り合いが出ていれば読むと思う。
- 遊びに行くときは、instagramを参考にする。
- 進学したい学科があるため、県外に進学する。
- 地元について聞かれれば、中津城や福澤諭吉旧宅は紹介するけれど、思い入れはない。
- 祇園祭や桜祭り、コスモス祭りに行く。

特に印象に残ったこと

【中津のいいところ！】

特に印象に残ったこと

【中津のいいところ！】



06

まとめ

謝辞

私達が地域診断を通して学んだこと

★地域の外の人の視点だからこそ分かる魅力がある！
私達にとっては魅力的なことが地域の人にとっては当たり前になっている。その魅力にもっと誇りをもってほしい！

★地域の人の声は、宝物！
現地の高校生や保育園の保護者の方の声から、地域の実情を把握できる。地域で活動をする人の想いや活動の実情は、地域の強みを見出すきっかけになる。

社会福祉協議会 吉田瑞穂様
すずめの家 吉田日出子様 お話下さった皆様
青年会議所 大賀秀一様 小畑育朗様 黒瀬稜太様 中山碧様 寺崎喜信様
七音保育園 尾家京子様 江玉睦美様 刳美鶴様
地域包括支援センター 相良愛子様
中津市民病院 折田博之院長
中津消防署 宮野様
南高校 山口智司、野仲貴博様
中津市外国人総合相談センター 矢野朝仁様 細川慈照様 魏文文様 Moh Moh Win様

謝辞 市役所の皆様

市長 奥塚正典様
副市長 前田良猛様
地域振興・広聴課 北山様
総合政策課 吉田悠平様 栗田貴之様 田中希恵様
防災危機管理課 安河内哲也様
農政課 加来朋大様
観光課 大畑様
企業立地・雇用対策課 江藤様
学校教育課 折元展希様
秘書広報課 矢野翔大様
まちづくり推進課 梶谷様

ご清聴ありがとうございました。
貴重な経験でした！

発表会を聞いた感想をぜひ教えてください！

Googleフォーム→

<https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSdISESaxXC9BfG8EccRu4ABSd1Ujyhm9omJBVsA#ILTFFglxQ/viewform?usp=header>

7. 謝辞

本実習を行うにあたり、大変多くの方にご支援いただきました。皆様のおかげで、実りある実習を行うことができました。以下の方々に心より深く感謝申し上げます。

社会福祉協議会 吉田瑞穂様

すずめの家 吉田日出子様 お話下さった皆様

青年会議所 大賀秀一様 小畑育朗様 黒瀬稜太様 中山碧様 寺崎喜信様

七音保育園 尾家京子様 江玉睦美様 勿美鶴様

地域包括支援センター 相良愛子様

中津市民病院 折田博之院長

中津消防署 宮野様

南高校 山口智司、野仲貴博様

中津市外国人総合相談センター 矢野朝仁様 細川慈照様 魏文文様 Moh Moh Win様

市長 奥塚正典様

副市長 前田良猛様

地域振興・広聴課 北山様

総合政策課 吉田悠平様 栗田貴之様 田中希恵様

防災危機管理課 安河内哲也様

農政課 加来朋大様

観光課 大畑様

企業立地・雇用対策課 江藤様

学校教育課 折元展希様

秘書広報課 矢野翔大様

まちづくり推進課 梶谷様

中津地域の皆様

(順不同)